

NDR エルプフィルハーモニーのブラームスを聴く

2023年12月31日 虎長

NHK FM「ベストオブクラシック」12月20日の放送は、11月28日にサントリーホールで演奏されたブラームスのピアノ協奏曲第一番と交響曲第一番。指揮アラン・ギルバート、ピアノ反田恭平。実は、11月29日に同じ会場・曲目・演奏者による大和証券貸切公演があり、僕は招待券を入手して心ゆくまで堪能できた。感想をここに書きとどめる。

音響効果のよい、サントリーホールには何度か足を運んだが、いつも座席は中央付近。今回の座席は二階で、舞台に向かって右の壁に近いところ。よい席とは期待しなかった。ところが、座ってみると、突き出したボックスの一番前で、舞台全体がよく見え、ピアノ演奏者の姿も、良い角度から見ることができた。これが最初の満足。

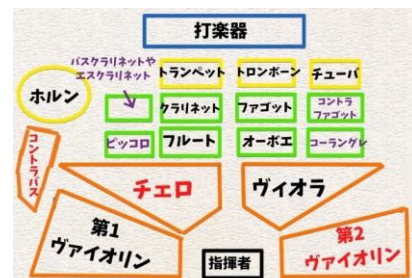
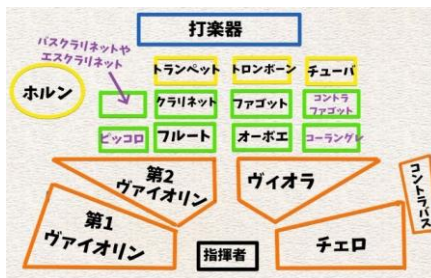


NDR エルプフィルハーモニー管弦楽団は、ハンブルク NDR(北ドイツ放送)交響楽団が、本拠地を旧市街から、川岸倉庫群に完成した新ホールへ 2017年1月に引っ越して(右の写真)改称したもの。

ハンブルクはブラームスの生誕地でもあり、ファンの期待を先取りしたのか、今回の日本公演は全6回、曲目が共通とのこと。

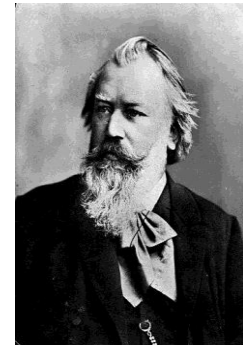
「ハンブルクは北ドイツで、どんよりとした気候で重厚な雰囲気。だからブラームスの音楽も重厚」というステレオタイプな説明がある。今回の演奏を聴いて、そのような見方は全く誤りとはいえないが、一面的であると強く感じた。特に交響曲第一番の演奏が軽いというのではなく、堅実であるが鮮明で爽快だったからである。ブラームスはウィーンでの活動期間が長かった。明るい感じの曲が多いメンデルスゾーンだって活躍の場はライプツィヒとはいえ、やはりハンブルク生まれだ。

今回の演奏の音がくっきり聞こえた一つの理由として、一般的なストコフスキー・シフト(下図左)でなく、古典配置(下図右)だったこともあるような気がする。弦楽器の高音・低音が対称的に聞こえる。第1ヴァイオリンと第2ヴァイオリンを合わせるのが大変そうだが、そこはプロだから…。



反田恭平が自ら率いるジャパン・ナショナル・オーケストラを、サントリーホールで2023年10月末に指揮したブラームスの交響曲第一番の一部の映像を見ると、全頁の図と異なりチェロとコントラバス

は向かって右に寄っているが、第1、第2 ヴァイオリンの左右対称は同じ。この曲では、ブラームスが意図的に第1、第2 ヴァイオリンの曲を対象的に書いたところがあり、この配置でステレオ効果が増すとのこと。



NDR エルブフィルハーモニー管弦楽団

上：反田恭平 下：アラン・ギルバート

ブラームス

ピアノ協奏曲第一番

ブラームスがウィーンへ行くよりも前に書かれた、ベートーベンに親近性を持つ堅固に構成された協奏曲。カナダのピアニスト グレン・グールドがバーンスタイン指揮のニューヨーク・フィルとこの曲を1962年に共演したライブ録音があり、演奏開始前にバーンスタインが、「グールドの演奏は、この曲の持つダイナミズムから屢々かけ離れている」と聴衆に向かって紹介しているのが面白い[脚注]。この曲のダイナミズムは、今回、オーケストラも反田のピアノも十分に表現できていた。特に反田の演奏はメリハリがはっきりしていて、汗だくの熱演だった。アンコールは誰もがブラームスのピアノ曲小品と思っていたのだろうが、モーツァルトのトルコ行進曲を実に軽やかに弾いてみせた。聴衆から笑いが漏れた。

交響曲第一番

これは僕が大好きな曲である。フルトヴェングラーが1951年に、この曲をこの楽団で指揮したそうだが、僕はフルトヴェングラーが1952年にベルリン・フィルを振った、荘厳な演奏のレコードを高校生時代から愛聴していた。長らく、僕にとってのこの曲の標準かつ応援歌となっていた。後にシャルル・ミュンシュのパリ管弦楽団のレコードを聴いて、その湧き上がる情熱に圧倒されたことも思い出す。今回の演奏は、そのいずれとも異なり、爽快なもので、自分が応援歌として聴こうとしなくても、演奏者の側から積極的に応援してくれているように感じた。月並みな言い方だが、まさに元気をもらい、同行の家内と「よかったね」と言い交わした。アンコールはブラームスのハンガリー舞曲。

NDR フィルの首席指揮者は9代目まで欧州系ばかり、10代目アラン・ギルバートは初の米国人(母は日本人)。今回、16人の第一ヴァイオリンの中に日本人女性が3人もいるように、楽団員の国際化も進んでいるようだ。それで、楽団の音も変わってきているのかもしれない。

「モダニストのワーグナー、保守派のブラームス」との見方が近年見直され、ブラームスは「モダニスト」、「リベラリスト」、「現代音楽の先駆者」とも言われるようになってきている。今回の演奏を聴いて、なるほど、と感じた。ワーグナーの後継者は映画音楽作曲家以外に殆どいないが、ブラームスの後継者は多数いるのも頷ける。

[脚注] 後年のエッセーで、グールドは「ブラームスに未来を読み取る方法を用いた」と述懐している。